【229】

氏　名（本籍）	伊藤正哉（岐阜県）
学位の種類	博　士（心理学）
学位記番号	博甲第 4369 号
学位授与年月日	平成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	**自分らしくある感覚（本来感）についての心理学的研究**

主　査	筑波大学教授	医学博士	小　玉　正　博
副　査	筑波大学教授	教育学博士	田　上　不二夫
副　査	筑波大学教授	博士（心理学）	庄　司　一　子
副　査	筑波大学教授	博士（心理学）	吉　田　富二雄

論文の内容の要旨

（目的）

本論文は，人々の「自分らしくある感覚（本来感）」の形成過程およびその様相について実証的に検討し，その統括的なパースペクティブを得ることを目的としたものである。

（対象と方法）

本研究は，理論編（序章，第 1 章，第 2 章）と実証編（第 3 章から第 6 章および最終章）の 2 部構成となっている。本研究は大学生および中高年期成人を対象として一連の調査研究によって上記目的に沿った実証的検討を行っている。

（結果および考察）

序章では現代社会の「自分」にまつわる社会現象・言説が吟味され，「本当の自分」や「自分らしさ」に関する実証的研究が欠如していることを指摘した。次いで第 1 章で自己に対する先行研究を理論的に概観した上で，「自分らしくある感覚：本来感（Sense of Authenticity）」の研究価値について論議されている。第 2 章では実証的検討の前に 5 つの目的（本来感概念の明確化，本来感が関わる実生活状況と自己状態の同定，本来感と精神的健康との関係，およびそれらの発達的な検討）が検討された。

第 3 章では本来感と実生活状況との関係が検討された。探索的調査（研究 1）により，本来感は対人関係の親密さや温かさ，生活・活動場の充実，肯定的な心身状態により影響を受けている可能性が示唆された。また，ライフスタイルと本来感との関係での男女差の検討（研究 2）から，男性において本来感は友人との交流や健康的生活，肯定的感情をもたらすライフスタイルに関連することが示された。対人関係性と本来感との関連について文化的自己観（独立優勢者・協調優勢者）別に検討した結果（研究 3），①本来惑の程度は独立優勢者が高いが両者において本来感と精神的健康と関連し，②対人関係上での自己表現が本来感を促進させ，③協調優勢者で他者への友好的関係性が本来感を促進させることを示した。

第 4 章では本来感と自己のあり方との関係が検討され，その結果，①過去の自己形成経験に影響を及ぼし

た活動が自律的か他律的かにより本来感の高低が規定されること（研究 4），②本来感が主体的自己形成を促進させること（研究 5），③自尊源の随伴性と充足性を測定する尺度によって本来感と優越感，自尊心との関係を検討した結果，本来感は内的自尊源，優越感は外的自尊源と関連し，仮説モデルが支持された（研究 6）。

第 5 章（研究 7）では本来感と精神的健康との関連性，本来感とアイデンティティとの異同が検討された。その結果，アイデンティティは無力的認知・思考のみを低下させていたが，本来感は無力的認知・思考，抑うつ・不安感情，身体的ストレス反応を軽減させ，よりストレス反応への緩和効果を示していた。

第 6 章（研究 8）では中高年期成人を対象に本来感の生涯発達的様相および時間意識との関係が検討された。その結果，本来感は年代とともに上昇し，50 代での停滞後 60 代で再度回復し，70 代以上では高水準に安定することが示唆され，①高齢者では積極的な生活状況で自分らしさを感じることが全般的な本来感にとって重要で，②全年代で高い本来感は過去を肯定的に捉え，未来に希望を持ちつつ人生を受容することが関連し，③本来感と精神的健康は関連することが確認された。最終章では 8 つの研究の知見を総括し，その学問的貢献を考察した上で本論文の限界および今後の研究の方向性が示された。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究の価値は大きく二点挙げられる。一つは，我々が日常的体験の中で知覚している“自分らしさ”や“ありのままの自分”という感覚を「本来感」という新たな概念によってとらえ，それが個人のウェルビーイングに促進的に影響することを実証的に明らかにした点である。二つには，本来感が生涯発達的にどのように発展・推移していくか，そのプロセスと生活の営みとの間にどのような関連性があるのか，といった広汎で重層的な自己形成過程を明らかにしようとした点である。研究の論理的展開および手法も手堅く，作成尺度の理論的および実証的検討も堅実に行われている。本論文は本来感が個人のウェルビーイングに寄与するポジティブな健康生成的個人資源であることを実証的に明らかにした極めて独創的な研究であり，博士論文として十分な水準と内容を有するものと評価できる。ただし，本研究は横断的調査研究であるため，本来感の力動的側面への検討が必ずしも十分とは言い難い。今後，本研究の価値をより一層高める上でも，よりダイナミックなアプローチを考慮した研究の掘り下げを期待する。

よって，著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。